

コラム No. 189

「大学の授業は、

Aーにとって代わられるか」

二〇一八年七月三十日

江尻 桂子

学生の頃、心理学専攻のクラスメイト十八人で「なんでもランキング」と称した投票をした。不本意なことに、私は「授業中、よく寝る人」として選ばれた。心理学の授業はどれも面白いものばかりだったので、授業中に寝たという記憶はほとんどない。ただ、一般教養科目で、しかも大講義室での授業だと、睡魔に勝てないこともたびたびあった。

だからというわけではないが、自分の授業で学生が寝ていたとしても（あまりそういう学生は見当たらないが）、とくに腹を立てたり、注意をしたりすることはない。むしろ、学生の睡魔に勝てるような面白い授業ができなかったことを真摯に受け止め、次回からの反省材料としている。

ところで、大学の授業は「面白い」ものであるべきだろうか。それとも必要な知識を正しく与えれば、それで良いだろうか。議論が分かれるところだが、私自身は、授業が面白い（interesting）なものである（ことは大切だと思っている。九十分×十五回という限られた時間のなかで、その学問分野について十分に教えることは難しい。だから授業を通して、少しでも学生に興味をもってもらい、それによって学生自身が能動的に学びを深めていくことが大切だと考える。

学生の頃、社会心理学の初回授業で、S先生が次のような話をされた。社会心理学の知識を学生に正しく伝えたいなら、教科書を何冊か与えてそれを読んでもらえばよい。それなのになぜ、わざわざ教員が教壇に立ち、授業をする必要があるのか。それは、授業を通して学生に、その教員自身のものの見方や考え方を知ってほしいからだ。さらには、その教員自身の人となりを知ってほしいからだ。そんな内容であった。

あれから四半世紀がたった。あのときS先生の話に感銘を受けた私はいま、授業を通して、

学生たちに何を伝えているだろうか。

授業では、いつも「コメントシート」（授業に対する感想や考察）を提出してもらっているが、時折、こちらが全く意図していなかったことを学生が感じ取っていることに気づく。例えば、「保育の心理学」の授業では、「将来、自分が子どもをもったときに役立つ内容だった」とか「子供を育てるのが楽しみのになった」といった「コメントをよく目にする（もちろん、子どもがいかに可愛いかを授業で伝えているわけではない）。また、「家庭支援論」の授業では、支援に関わる社会の仕組みの話が中心であるのにもかかわらず、「親の育児の大変さが分かった」や「育ててくれた親に感謝したい」という「コメントのほか、「自分自身の将来設計（結婚や出産）を考えるようになった」という「コメントもよく寄せられる。

当然ながら、学生が感じ取ったようなこと（たとえば、将来設計をきちんとしようなど）を、授業のなかで直接、伝えているわけではない。ではなぜ、学生はそのような感想を抱くことになるのだろうか。おそらく私は、その日の授業

に関連したかたちで、日々の育児や仕事のなかで経験したことや感じたことを学生に伝えていくのだろう。そして、それらを受け取った学生たちが、自分自身の親の育児を振り返ったり、将来について思いをせたりするのではないかと思う。

これが本当に良い授業のやり方かどうかはわからない。もっとニュートラルな立場で、もっと学問的知識に特化したかたちで、授業を提供する方法もあるだろう。しかし、学生時代にS先生から受け取った言葉に従えば、それが大学の授業であれ、小中高校の授業であれ、教員自身の考え方やものの見方、そして人生観までもが色濃く反映されるのは当然のことであり、むしろそれがあるゆえに、学生がその授業を面白かった、また、心に残るものであったと言ってくれるのではないかと思う。そこに「人」が「人」に教えることの意味があるのかもしれない。

近い将来、大学の授業がAI（人工知能）にとって代わられる日が来るかもしれない。そしてAIは、一人ひとりの学生の理解度や学習の進度にあわせたかたちで授業を提供できるかも

しれない。そのときに、いや、AIでなく教員が教えることに意味があるのだ、と我々大学教員は言えるだろうか。できればそうありたい。そのためにも、「自分しかできない授業」とはどういうものであるのか、何をどう教えれば、学生は今日の授業を面白かった、興味深いものだった、もっと深く学びたい、と言ってくれるのか、それらを考えながら、今後も授業のあり方を模索していきたい。

（えじり・けいこ）